

井月が姓名を署したものは是まで見及んだものではこれが唯一である。(姓を書いたのは他に
 一通第二十四の書簡に見る) 山圃は宮田村の酒商正木屋の主人で山浦藤左衛門、明治十四年
 に七十三歳で歿した。俳画をも能くして、井月との合作も沢山遺って居る。伊那峡落の武田
 耕雲齋を助けたという人で、井月も長者として敬意を払って居たそうである。(山浦家蔵)

述辞

御慶目出度申納候。旧臘は何廉御世話に相成千万難有仕合、当早春も御伺申上候

筈の処、{ここまで新年のあいさつ文。「旧臘」とは昨年十二月のこと。「早春」は、現在では
 二月～三月のことだが、旧暦では正月のことになる。}

飯田版木相後れ、旁奔走のみに暇費に消光、いまだ春ころに相成不申、甚御疎遠申訳

無御座、【飯田での版木作成が遅れ、奔走のみに時間を費やし、まだ春が来たような気持ちにな
 らず、疎遠になったこと申し訳ございません、】

昨冬も両度飯田へ参り、金子も弍両相渡し出精いたし候て、早春には出来いたし候様に

と呉々頼置候へ共、【昨年の冬も二度飯田へ行って、お金も二両渡し、がんばって早春には出
 来るようにくれぐれも頼んできましたが、】

月迎いたし候而、諸方の注文混雑、殊に伊那県の版木も相残り有候て、夫故延引いたし

候趣申述、是も無抛寛候へ共、【新しい月を迎えて、あちこちからの注文が混雑して
 おり、とくに伊那県の版木も残りがあって、それゆえ遅れているとのこと、それも仕方なく思い
 ますけれども、】{伊那県は、明治元年～明治4年まで存在した県。行政文書の依頼がたくさんあ
 って、井月の依頼が後回しにされたのだろう。}

ぐせいごと たいだいまごろ おそ はいてい たくぞんじおりそうら え ども なに もうす しだい きゅうとうせんぼう
愚生事にいたしては、只今頃は遅くも配呈いたし度存居候へ共、何を申も○次第、旧冬先方

より遣し 候 書付入 御覧 候。【私としましては、今ごろは遅くとも配布したく思っていたの
ですが、何にしてもお金次第、去年の冬に先方より送ってきた書き付けをご覧にいます。】

もつともさんこう いっけん そなえそうら え ども ところまんぞくつかまつら ず かれこれち ち こまりいりそうろう
尤 山好にも一見に備候へ共、□□□(?) 所満足 不 仕、彼是遅々いたし 困入 候。【も
つとも山好にも見せようと準備していますが・・・(?)・・・満足できず、かれこれ遅くなって
困っております。】{一部不明のため意味が分かりにくい。}

くすう はちじゅうごほど あいな ごくぼそじ てまどりもうすべき ぞんじ ちょっと そうろうすりもので き
句数も八十五程に相成り、極細字にて手間取可申と存、それには一寸いたし 候 摺物出来に

つき きらんにいれそうろう おわらいなしくださるべくそうろう
付入 貴覧 候。御笑可被成下 候。【俳句の数も八十五ほどになり、極細の字なので版木を彫
るのに手間取っているようです。それについては、ちょっとした刷り物ができたので、ご覧にい
れます。お笑ください。】{極細字の印刷サンプルが出来たので見てほしい、ということだろう
か?}

なにぶんえんぼう ところ ぐせいたびたびおうらい そうらえ ざつび あいかさ そうろう つき このたびはん で き そうろううえ せんぼう
何分遠方の 処、愚生度々往来いたし 候へば、雑費相嵩み 候 に付、此度板出来 候 上、先方よ

きしよさままでもうしやりそうろうはず つき それ でむくころ え まかりありそうろう
り貴所様迄申遣 候 筈に付、夫より出向心得罷在 候。【なにぶん(飯田は) 遠く、私がた
びたび行き来して、雑費がかさみましたので、今度、版が出来たら先方よりあなたのほうへ連絡
が来るはずですので、そうしたら私が出向くつもりです。】

たよ ご ぎそうらわ ばはばかりながらさんこう しまでいっそう おさしだしくだされそうろうようねがいあげたまつりそうろう
便り御座候はゞ乍 憚山好子迄一草御差出被下 候 様奉願 上 候。【先方より連絡があつ
たら、すみませんが山好のところへ知らせて下さいますよう、お願いします。】

かつはんしたで き おいおいあいくわえ それ くちえ す あげきょうごう ご ぎそうろうことゆえきしよさままでさしおく もうすべくよ もうし
且板下出来追々相加、夫には口画摺り上ケ校合も御座 候 事故貴所様迄差送り可申やう申

おきそうろうあいだ あいとどきそうらわ ばよろしくおなお おつかわ くださるべくそうろう
置 候 間、相届 候ハゞ宜敷御直し御遣し可被下 候。【また、版下が出来たら、追々それに
加えて口絵刷りや校正もありますので、あなたの所へ送るように言っておきました。届きました
ら、お直しをしてください。】

もし又惣体出来の下摺不遣候はゞ、御序の節御催促可被成候様奉希上候。【もし全体
ができた下刷りを送ってこなければ、何かのついでに催促して下さいますようお願いします。】

是も校合いたし不遣候てハ相叶不申、何れにいたし候ても廿日頃には遅くも出来の図り
に御坐候。【それ（=全体の下刷り）も校正してやらなければなりません。いずれにしても二
十日ごろには遅くとも（版が）できる予定です。】

先は此段得貴意度、略儀ながら如此御座候恐惶謹言【まずはこの件につきまして、あな
たのお考えをいただきたく、略儀ながらこのとおりの手紙を差し上げました。】

しょうがつじゅうさんにち せいげつはい
正月十三日 井月拝

さんぼ がけい せんか
山圃雅兄 尊下

がんにつ いりく ひと みなちようじゃ
元日や入来る人は皆長者

よふか うま ぞうに
夜深とおもふ間もなき雑煮かな

つゆ わかな かご お
露ちるや若菜の籠の置きどころ

うめ わたくし よる かど
梅にその私 はなし夜の門

うぐいす はつね おい に じまん
黄鳥の初音や老に似ぬ自慢

なとうしいでそうろう ごしょうひょうなしくださるべくそうろう
などゝ申出候。御笑評可被成下候、

おもてがき
(表書)

いのうえかつぞう
井上克三

さんぼくにすけさま ようようしょ
山圃国輔様 要用書

此の書簡中の摺物とは明治三年の午の春の歳旦帖ではなかろうか。それは芭蕉の蓬萊の句
を初めに、井月の「露ちるや」で終り、此の中に出て居る俳人の数は八十四人に及び、山圃、
朱麦、玉嘯、山好などの名が終の方に見える。